

三河地方に伝承されている神事のおよび流派について

五賀 友継

9月22、23日と愛知県豊川市を訪れ、ここで行われている神事的に参加するとともに、牛久保矢場における日置流雪荷派の継承について学んできた。

今回オーストリアから来日中のロベルト氏とともに、22日は牛久保矢場で神事的についての概要と、作法を教えていただき、23日には豊川八幡宮で遷移祭に参加してきた。

神事的について

現在三河地方には100以上の矢場が継承されており、主に神社の中に残っている。

この地域では弓道場とは言わず、矢場と呼んでいる。

矢場は昔ながらの形を保っており、例えば安土の形を見ても古文書に登場する形式を基本としており、大安土の前に小安土をもうけている。

現在の弓道場のように、射手が何人も同時に射位に立ち、それぞれが持ち的で引くのではなく、順番に一人ずつ引いていくようになっている。また、ほとんどの矢場には囲炉裏があり、ここでは暖を取ったり、料理ができるようになっている。

矢場では懇談しながら弓を引けるようになっており、現在の弓道場とは大きく異なっている。

毎週週末には、いずれかの矢場で神事的あるいはお祭り弓が行われており、そこへ各矢場から参加してきている。参加者は基本的にどこかの矢場、流派に属していなければならず、その印として参加時に上差しの矢と同じ4枚羽の矢で、矢じりのついていない矢を持参する。この矢の籠には、流派、先生の名前、矢場（出身地）、名前が記されており、この矢を矢振りに使う。

矢振りの仕方については、今回だけでは覚えきれなかったため、次の機会に学んできたいと思う。

射会には様々な的が用意されており、様々な絵的や扇、的が安土の高い位置にかかっていたりと、的中心をくすぐる的がたくさん用意されていた。的中した場合は商品が的のごとももらえるような仕組みになっていた。引く順番は矢振りで決まっており、射手は次に引く人を把握し、順番が来たら呼んであげることで、引きそびれないようになっている。金的を射とめたものは、翌年のお祭りで何流の誰かということを書いた額を境内に掲げることができるようになっており、これは射手にとって大変名誉なこととなっている。

射会中、愉快地飲んで食べて引いて、とにかく楽しむことを第一としており、参加した自分自身、本当に楽しかった。矢場も歴史を感じるような建物であり、まるでタイムスリップした様な一日であった。



古式矢場の様子（豊川八幡宮）

牛久保矢場における流派の伝承について

今回の訪問では豊川市の牛久保矢場を訪れたが、ここでは日置流雪荷派を継承しており、現在山本良輔先生の下で多くの門人の方々が修練されていた。

山本先生で日置弾正正次から数えると17代目である。

三河地方における弓術とは、戦国時代に徳川家康が予備軍として百姓、町人に弓を引くことを許可したことから始まり、勧進的という射会が各寺社で執り行われるようになった。

武士以外にも弓術を奨励したため、多数の師匠が必要となり、苗字を持っているような大きな庄屋やその地域の地主を鍛え、免許を分け与えている。彼らはそれぞれ仕事を持っており、自身でお金を稼いでいたため俸禄をもらう必要がなく、そのため人数制限を設けず、積極的に指導していた。

武家の場合、免許や目録といったものは、各大名に仕える際に俸禄に関わることとなるため、これを家で継いでいくことが多かったが、ここでは分け免許を積極的に出していることがわかった。

以上のような理由と、明治時代に武家社会が終わり、それまでのように弓が必要となくなった混乱した時代の中、神事的を現在に残すために、三河地方に現在伝わっている流派、そして免許を与える理由が、技術の伝承と俸禄を目的とした武家社会における免許皆伝と異なっている。

流派の成立の過程を見ていくと、個人が戦場での経験より独自の技術を持つようになり、それを教えるようになることで、集団が成立、そこに師弟関係が成り立つことで技の伝承が生まれ、流派が成立したと考えられる。流派が存続していくためには、

- 1、天才的人物の出現
- 2、技法が非常に高度
- 3、技法の体系と教育課程が整備されている

といった条件が必要である。主に技の伝承が中心となっており、3はその後流派が存続していくために非常に重要な要素である。

流派の技法の体系と教育課程を修め、その形を自分のものとし、最終的に形を離れて自由に表現するようになったとき、免許皆伝が与えられたと考えられる。

しかし、三河地方で弟子に免許を与える最も大きな理由は、その地域の射手をまとめることと、矢場を管理していくことである。そのため、免許を与える際に、弓の技術と、地域の射手をまとめられる力が求められている。

牛久保矢場の代々の師範を見てみると、地元の有力者がなっているケースが多くみられた。

一方で、射術に関しては武徳会や日弓連の影響を受けており、現在は技術の伝承が大きく失われているのが現状である。中央との弓の交流が盛んであった地域では、特に古流を維持することが難しかったことが考えられる。

打ち起こしを見てみると、師範は正面に打ち起こしを行っているのに対して、門人の中には斜面で打ち起こしている方も多くいた。もし、新人の方が入ってこられた場合どのように指導されるのかと聞いたところ、「今後は射術では」斜面に構え目通りで打ち起こし、鋭く離す、ということをおまかに教えたい。しかし、正面打ち起こしで育った人も多いので、後は個人の裁量に任せ「正面繰法も容認する」とのことであった。

一方で、三河の流派には現代弓道が失った多くのものが未だに存在しており、非常に貴重な存在であると感じた。それは矢場の作り、矢場における作法、神事的の進行、そして矢振りの仕方である。矢場とそこにある伝統を残し、地域の射手をまとめていた。

今回の訪問を通じて、流派について改めて考えさせられた。日本が明治維新を迎え、近代化を図る頃、弓術の重要性が薄れ、その中で更に流派を存続させるためにはある程度の取捨選択が必要であったのではないかと感じた。

三河では作法や矢場をそのまま守ったのに対して、一方で技術面を時代の流れの中で失ってしまったと思われる。他の例を見てみると、岡山の徳山弓道場では的前射術に特化し、それが後の浦上先生や稲垣先生に繋がっていると考えられるが、一方で的前以外の射法や、弓の行事における作法は失われている部分が多いのが現状である。

こういった各流派の特性や地域を理解し、古流を守っていかなければならないと強く感じた訪問であった。今回の訪問に際し、歓迎して下さった山本先生、二郎さんを始めとする牛久保矢場の皆さん、そして何よりも神事的へのきっかけを作ってく下さった為田さん

に、この場を借りてお礼申し上げます。



牛久保矢場の様子 (左上、右上、左中)
豊川八幡宮での神事的 (右中、左下、右下)

